

## 中学校における校内研究（校内研修）の在り方

報告者 センター協力研究員（富士市立岳陽中学校長） 佐藤 雅 彰

教育の問題は、突き詰めていけば教室での物語を創り出す教師の問題となる。そこで各学校では教師を育み育てる場として校内研修を位置づけている。しかしながら、現実には、ビジョンや理論もなく、教育実践を振り返る気持ちにもなれない研修の場が多いように思う。その責任の多くは校長の問題である。

確かに、中学校においては「生活指導」「進路指導」「部活動指導」があり、研修の場を持つことの大変さも理解できる。しかし、「忙しいから場を作れない」とする思い込みが改革を阻んでしまう。日々の対処療法に追われ、教師の専門性や授業力の向上を図る「校内研修」を片隅に追いやっていて真の学校改革はできないように思う。

では、教師が学び合い成長し合う校内研修の構築はどうすればいいのか、その一方法として、以下のような活動システムを構築したい。

第一は、教師全員で学習観の共有を図り、年1回以上は授業公開をする。

第二は、授業公開された実践を丁寧に振り返る研究協議会を通して「実践の中の理論」を創る。

第三は、本校の実践を対等な立場で支援していただける研究者（スーパーバイザー）を招聘する。

1) 教師全員で学習観の共有を図り、年1回以上は授業公開する。

校内研修で何をするのかを明確にせず、単に公開授業の回数だけを増やしても授業は変わらない。本校では、教師全員が一時間の授業に「活動」「協同（小グループ活動）」「表現の共有」の3要素を組み込み、一人ひとりの学びを保障する学びの成立を目指している。これを学習観の共有と呼んでいる。一見、形式的な縛りのように見えるが、教師の独善を防いだり、個々の力を集約したり、教科の壁を乗り越えたりするには、共通の土俵となる学習観の共有（ビジョンの確立）は必要である。特に生徒同士の「協同学習（小グループ活動）」を取り入れたが、低学力層の生徒の学力向上が実証できた。

2) 授業公開された実践を丁寧に振り返る研究協議会の場を通して「実践の中の理論」を創る。

ビジョンや研修する気持ちはあっても、中学校では研修する場が極めて少ない。また、研修の場が他者の授業から自己の授業を振り返る反省的な学び合いになっていない。本校では、研修の場を確保するため、組織・機構の改革を図り、水曜日の放課後は職員会議と校内研修だけとし、最低月2回（全体研修と学年研修）の場を確保し、公開授業のすべてを研究協議している。特にビデオ研修による学年研修は学年教師の同僚性を育み育てる機会となっている。また、授業公開者には指導案の事前配布を廃止するなど教材研究に打ち込む時間も確保した。

さらに、校内研修は指導の巧緻性を問題にするのではなく、明日につながる研修にすべきである。それには、「活動」「協同」「表現の共有」を生徒自身が自らの学びのスタイルとして獲得できているかどうかを丁寧に吟味することである。具体的には、生徒が対象や他者や自己とどのようにかわり、教師が生徒とどうかわり、生徒がどのような場面で何を踏み台にして「背伸びとジャンプ」を起こしたか等、学びの本質を探究し、自校なりの「学びの理論」を創り上げる活動とすべきである。

3) 学校外の研究者の導入とネットワークづくり。

教師が実践者としての自負を持つことは大事であるが、教師だけでは理論に欠ける。そこで、学校外の研究者を導入することは硬直性や閉鎖性の打破になる。ただし、「講演」や「講評」という形での指導ではなくて、あくまでも学校が主体性を持ち、教師と研究者が対等の立場で「実践の中の理論」を創るようにしたい。学校が研究者に依存してしまうと教師の自律性・自立性は育たない。

また、同様のスタイルで改革に着手している学校同士のネットワーク化も必要である。他校の研修に参加することで教師の実践活動に対する励みとなったり、自校の研修が深まったりする。